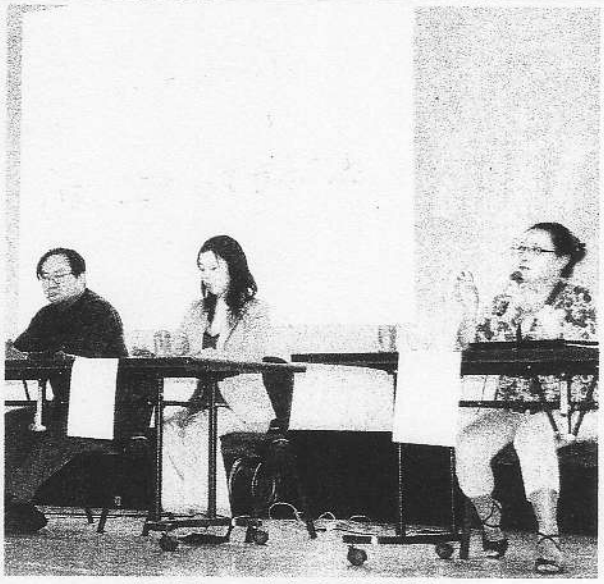
「被災地支援 継続を」

長崎大でフォーラム 学生らが報告



市民フォーラムで支援活動について報告する団体のメンバーら

東日本大震災の支援活動に携わるNPOや学生らが5日、長崎大で開かれた市民フォーラムで活動状況を報告し、学生や市民ら約150人が聴講した。

募金活動などを通じて被災地支援を行う同大の学生団体「長崎Sip―S」が主催した。5月に宮城県南三陸町でのがれき撤去、回収された写真の洗浄を行ったNPO「島原ボランティア協議会」の旭芳郎理事長(57)が被災地の状況を報告。「仮設住宅ができると、被災者は(逆に)すべてを失った現実に引き戻される。これからも末永く支援の手を伸ばしたい」と述べた。

Sip―S代表の同大3年、野口和暉さん(21)は「学生には時間や体力があるので、パワフルな活動を続けたい」と意気込みを語った。

母と兄が福島県に住んでいるという長崎市辻町の姉川タイ子さん(64)は「長崎の多くの人が支援を行っていて驚いた。本当に感謝しています」と話していた。